

建築学会栃木・埼玉支所交流会

建築学会栃木・埼玉支所交流会が過日17日に開催された。すでに2月26日に[宇都宮を訪問](#)、宇都宮美術館で開催された特別展「石の街うつのみや 大谷石を巡る近代建築と地域文化」と同館ホールで開催されたシンポジウム「凝灰岩と近・現代建築—国際性と地域性」に参加させて頂いている。

今回、ホーム&アウェーと言う事で恐縮ながら熊谷に御参集賜り、ものづくり大学、日本遺産に選定された行田の足袋蔵、深谷市のホフマン輪窯、東松山市の丸木美術館を御案内させて頂いた。



熊谷駅を9時40分出発、チャーターしたマイクロ・バスでものづくり大学に向かった。すでに我がブログでも紹介しているが、「コルビジェのカップマルタンの休暇小屋の原寸のレプリカ」を見学頂いた。学生達が2011年に現地実測調査を行い、2011年—2012年度に卒業制作として制作したものである。



案内役は、このプロジェクトを指導した八代教授にお願いした。

オリジナルは地中海を眼下に一望する急峻な崖地にあると言うが、もの大のそれは調整池を地中海に見立てて建設されている。建築、家具は勿論の事、建築金具、平ビス1本に至るまで精巧にコピーし制作されていると言う。

居ながらにしてコルビュジエの空間を体感出来るのだから有難い。栃木支所の皆様も、大変喜ばれていた。

先ずは、順調に交流会はスタートしたのである。続いて、足袋と暮らしの博物館の見学へ。



足袋と暮らしの博物館は、2005年10月に開館、老舗の牧野本店の工場と土蔵を借りて改装、昭和初期の足袋産業全盛時代のままに工場の様子を再現している。

足袋の生産も現在行われていて、作業ぶりを興味深く拝見した。ここでは、足袋も売られていて、多くの方が現代風にアレンジされたモダン足袋を買い求めていた。

見学の後、深谷へ移動。

昼食は、私が1番に推奨しているイタリアンレストラン「[トラットリア・コージ](#)」を選ばせて頂いた。

その席で、午後のコースであるホフマン輪窯の解説を、元





日本煉瓦製造株式会社の社員であった煉創の高橋社長に御願いました。彼は、日本煉瓦の最後まで社員であり、その経験を生かして現在、煉瓦の専門店を運営している。煉瓦の歴史と製造施設の詳しい説明を頂いた。

参加者の各自己紹介の後、福地シェフ特製のスペシャル・ランチに舌鼓を打った。

日本煉瓦製造株式会社旧煉瓦製造施設は、ホフマン輪窯6号窯と旧事務所、煉瓦造りの変電所を含め、国の重要文化財に登録されている。私も初めての訪問で、興味深く見学をさせて頂いた。



日本の近代国家建設に関わった煉瓦工場が深谷市にあった事も感慨深く、たった1つだけ残された輪窯の遺構を、この先も大切に保存しなければならないと強く思っているのである。

深谷から、最後の見学地、丸木美術館に向けて東松山市に移動した。

17日の朝日新聞・朝刊に、原爆の図で知られる日本画家の丸木伊里、洋画家の俊夫妻の遺影が国立広島原爆死没者追悼平和祈念館に登録され、公開が始まったと言う記事が掲載されていた。偶然を超えたタイミングであり、今回の両支所交流会が、されに意義深いものに成った、と思ったのである。

見学を終了して熊谷に戻り、熊谷を代表する老舗、鰻の「広川」で懇親会を持たせて頂いた。

支所は、日本建築学会の中で、特に地域に深く関わる唯一の機能を請け負っている組織である。お互いの支所活動の情報交換をし、より有効なプログラムを模索する事で、更なる支所活動が可能になるであろう、と思われる。

ホーム&アウェーで行われた今回の交流会を通して両支所の絆は、太く強いものに成ったと思われる。今後、関東支部全支所とも、今回の交流会を先例として充実した学会活動に繋げて行きたい、と念じている。

藤原栃木支所長をはじめ、御参加を賜りました学会員の皆様に心から御礼申し上げます。ありがとうございました。

支所交流会の記事



ていた。芝生は9月下旬まで養生し、保護者や地域のみなさんにも披露していく方針。

今後は体育の前の準備運動の際に利用するほか、虫の観察、楽しい遊び場など多目的に活用していく。岡片純一教頭(48)は「学校がきれいななり、子どもたちにとってもなかなかない経験ができた。この場所を大切に、地域の方々にも寄ってもらえるような場になってくれれば」と話していた。

(村田恭二)

ものづくり大や 足袋蔵を巡る

建築学会埼玉・栃木支所 日本建築学会関東支部埼玉支所(時田芳文支所長)は、同支部栃木支所(藤原宏史支所長)と合同で、行田市のものでつくり大学や日本遺産に認定された市内の足袋蔵などを巡る交流ツアーを開催した。

参加者たちはものづくりの大学で、仏の建築家ル・コルビュジエが手掛け、世界遺産に登録されたル・コルビュジエ夫妻の別荘「カップ・マルタンの休暇小屋」を原寸再現した作品を見学した。

作品は、同大の「世界を変えたモノ」に学ぶ「原寸プロジェクト」の一環として、世界的名作住宅や工業製品などを原寸で忠実に再現し「生きた教材」として学内に展示することを目的に制作された。

実際に学生や教職員が仏で実測調査して忠実に再現したことを、同大の八代克彦教授が説明。建物の内部に使われているネジなども、原寸のレプリカを制作するなど、こだわりの再現に、参加者たちは感銘を受けていた。

また、深谷市に残るドイツ人ホフマンが考案し、多くのれんがを焼いてきた1907(明治40)年建設の「ホフマン輪窯」も見学した。

「両支所の情報交換が活発にできた。今後の活動のために生かしていきたい」と時田支所長は話した。

(佐藤健哉)

原寸再現した「カップ・マルタンの休暇小屋」の内部を見学する参加者たち。行田市前台のものづくり大学。

過日6月17日に行われた栃木支所との交流会の記事が、本日埼玉新聞に掲載頂いた。即時性が必要な記事では無いので、行事から24日目の報道とは言え、有難い。日本建築学会関東支部に支所があり、その支所活動として支所交流会が行われた事、ものづくり大学に建設されているル・コルヴジエのカップ・マルタンのレプリカ、行田足袋蔵、深谷のホフマン輪窯と、建築学会員にとって意義ある場所の見学会を行った事を報道頂いた事に意義があり、この記事をお読み頂いた方に、近くに価値ある面白い建築がある事を知って頂く事も、更に意義が在る。同行取材を頂いた佐藤記者には、感謝である。ありがとうございました。